

「みどりのくつした どこだろう？」

お日^ひさま きらきら はれた日^ひに

リゼッテは おさんぽに 出^でかけました。

すこし あるいていくと、

リゼッテは くつしたを ひとつ 見^みつけました。

とっても きれいな みどりいろです。

「わーい うれしいな！

こんな すてきな くつした なかなか 見^みつけられないわ！」

リゼッテは くつしたを はくと、 るんるん あるいて いました。

それからすぐに、 リゼッテは トムと ティムに あいました。

いつも リゼッテを からかってくる ねこの きょうだいです。

「ねえ みて！ これ わたしが みつけたの。」

リゼッテは じまんしました。

「くつしたが かたっぽだけ？ やっぱり おまえって まぬけだなあ。

もうかたっぽは どこに あるんだ？

くつしたは ふたつで ひとつだろ？」

「ああ そっか。」 リゼッテは しょんぼりしました。

「くつしたは ふたつで ひとつだよね。

それじゃあ もうかたっぽの くつしたも さがさないと。」

それから、いちばんたかい木の てっぺんに のぼりました。

ずーっと とおくまで 見わたすことが できます。

でも ざんねん。

リゼッテが どんなに 目を 大きく ぱっちり ひらいても、

もうかたっぽの くつしたは どこにも 見あたりません。

「そうだわ！ きっと いけに おちちゃったんだ。」

リゼッテは 木からおりと、いそいで いけへ いきました。

いけにつくと、リゼッテは つめたい 水のなかに かおを
いれました。

すると そこへ、いっぴきの おさかなが やってきました。
——ひよっとしたら、 なにか しているかも。

「こんにちは おさかなくん。かたっぽの くつしたを
見なかった？」

「いいや、見てないよ。それより 見て！

大きな ポットと 小さな くま手なら あるよ。

空から ふってきたんだ。すごいでしょ？」

「そうだね。」リゼッテは ためいきを つきました。

「でもね、わたしが さがしているのは かたっぽの くつしたなの。」

リゼッテは がっかりして、
とぼとぼ いえに かえりました。

「どうしたの？ そんなに かなしそうな かおをして、
リゼッテちゃん。」

おかあさんが リゼッテを だき^あ上げました。

「きょうね、 みどりの くつしたを かたっぽ 見つけたの。」

リゼッテは 小^{ちい}さな こえで こたえました。

「かたっぽの くつしたなんて つかえないわ。
だって、くつしたは ふたつで ひとつだから。」

「そうね、 くつしたは くつみたいに ふたつで ひとつだものね。」
おかあさんは いいました。

「はいている くつした、 ぬいだら ちょうだい。
あらってあげるわ。 ひろった くつしたは よごれているから
そのまま はかないでね。」

リゼッテは にわに ちょこんと すわって、
くつしたが かわくのを まっていました。

そこへ 「このぼうし、 きみの？」と、
ともだちの バートが やってきました。

「ぼうし じゃなくて くつしたよ。」
リゼッテが すかさず こたえると、

「へえ！ でも ぼく、 いままでずっと こんな すてきな
ぼうしが ほしかったんだ。 それ、 かぶってみても いい？」

「いいよ。」

リゼッテは おもわず わらいました。

「とっても にあっているね！」

「ほらね、 いいぼうしだって いったでしょ？」

「ほんとうだね。 もうかたっぽも あれば、バートに ひとつ
あげるのに。」

そのとき トムと ティムの きょうだいが いえのかけから
こっそり ちかづいてきました。

「ジャン。 おれたち、 もうかたっぽの くつしたを みつけたぜ。
リゼッテが さがしていた みどりの くつしただぞ！」

「どこに あったの？」リゼッテが ^{だい}大ごえで ききました。

でも、 トムと ティムは こたえずに
はしって にげてしまいました。

「ここまで おいでー！」

リゼッテと バートは ひっしに あとを おいかけました。

「はあはあ、 あのふたり ^{ちい}小さいくせに ^{あし}足が はやいな。」

トムは ぜーはー しながら いいました。

「でも くつしたは やらないよ。」

ティムは にやにや わらうと

「ぽっちゃん！」

そこへ リゼッテと バートが いきをきらして
かけつけて きました。

「ねえ、 くつしたを ちょうだい。」

「くつしただって？ もう もってないよ。
ほら。 とおくに とんで いっちゃったぜ。」

バートは リゼットの そでを ぐいっと ひっぱって いいました。
「ねえ、 もう あきらめよう。
トムと ティムは いじわるで うそつきだから。
くつしたが とんでいくわけないもん。」

「ひどいね。 きっともう もうひとつの ぼうしは
見つからないわ。」

リゼットは がっかりしながら いいました。

「でも そのぼうし、 もうすこし かぶっていても いいよ。
いえに つくまで かしてあげる。」

「ありがとう。」 バートも かぼそい こえで こたえました。

ふたりが いえにつくと びっくりすることが ありました。
リゼットの おかあさんが もうかたっぽの くつしたを
あんでくれて いたのです。

それも、 リゼットが 見つけたのと そっくりな
みどりの くつしたです。

リゼットは ぴょんと とびあがって よろこび、
おかあさんに だきつきました。

「リゼットも バートみたいに あたまに かぶるの？」

「もちろん。」リゼットは 目を きらきら かがやかせました。

「やった！ これで ぼくたち ふたりとも
おそろいの ぼうしが あるね！」
バートは うれしくなって るんるん おどりだしました。

ねるじかんになって バートは いえに かえっていきました。
リゼッテは ぼうしを かぶって ベッドに はいりました。
きっと、 バートも ぼうしを かぶって ねているだろうなあとおもいながら。

でも そのよる、 いちばん よろこんでいたのは
おさかなくんでした。

ちい小さな くま^で手と おお大きな ポットにくわえて、 いまは
ねごこちのいい みどりの ねぶくろに つつまれているのですから。